ひとりの子どもの涙は、人類すべての悲しみより重い

ドストエフスキーが長編小説「カラマーゾフの兄弟」の中で語ってる言葉なんです。私は日頃の対応で、子ども達の涙にはよく出会います。そして、その子ども達の母親の涙にも出会います。子どもの養育をめぐって、夫から、またその義理の親からも責め立てられ、かかった医者からは親が変わらなければと言われ、どう変わればいいのか分からず、八方ふさがり状態で流す母親の涙に。

ユニセフが発表しました子どもの「幸福感」に関する調査で、「自分が孤独だ」と感じている子が、西欧の主な国々ではすべて10%未満（最も低いオランダで2.9%）であるのに対し、日本だけが29.8%と飛び抜けて高かったんです。日本の子どものほぼ3人に1人が、「自分は孤独だ」と感じています。これは只事ではありません。

社会性昆虫のアリは、孤立させられるとストレスで寿命が短くなると言います。人間と昆虫を比べることに抵抗を感じるかもしれませんが、人間も社会性を持った動物であるが故に、不登校やひきこもりで子ども社会や実社会に入れなくなると、そのストレスでイライラして気持ちを抑えられなくなる、多くの子どもや若者に私は接してきました。そして、その孤独感から流す子どもや若者の涙にも。

でも、ドストエフスキーはそれ以前のソ連で、母親の涙よりその子ども達の流す涙の重さを感じ取っていたんですね。